

特集 ■ 第 19 回大会

特別講演 1

文化を遺す意義と努力—尾張徳川家を例にとって— VR 技術への期待



徳川義崇 徳川美術館館長（尾張徳川家 22 代当主）
Tokugawa Yoshitaka

「こんばんは」か「こんにちは」か微妙な時間帯ですが、只今ご紹介に与りました徳川でございます。今日発表させていただく講演のタイトルとしては、「文化を遺す意義と努力」というかっこいいというか大変そうなタイトルですけども、お話しする内容は、「文化をどのように遺し守るのか」といったところをテーマにお話しし、最後に今日は VR 学会ということなので、徳川美術館と VR 技術の関わりがあった部分について、僅かな例しかありませんが、ご紹介させていただければという風に考えております。

今日の話の中心は、徳川美術館は私のひいお爺さん、曾祖父である徳川義親が昭和 10 年に設立した美術館なんですけど、その設立した動機を義親が当主となってからの行動を追いながらご紹介させていただければと思います。

（「よくある質問」というタイトルのスライドを示しながら、）これは私の経歴ではなく、みんなによく聞かれる質問をパーッとまとめてみました。どうでもいいことばかりなんですけど、「歴史の授業で勉強する徳川さんですか？」とか色々な質問をされます。中には、「コンビニで買物をしたことがありますか？」とかですね（会場笑）、「吉野家やマックで食べたことはあるんですか？」とか、これは実際に私の宿泊している名古屋のホテルのスタッフに聞かれたんですけど、「電車に乗ることなんてあるんですか？」と。私は普段東京に住んでいるので、「名古屋に来るのに電車に乗らなかったらどうやってくるんだい？」って聞いたら、「籠はないですよね？」なんて真面目な顔して聞いてましたけど（会場笑）。それは置いて、よくこのようなことを聞かれます。世の中の人達から見れば、徳川に限らず松平や織田などの戦国武将の末裔は、今でもこの世のどこかに生きていて、実際にその人達に会った時には、浮世離

れした存在であって欲しい、自分たちとはちょっと違った暮らしをしていて欲しいという願望があるようでして、それが先ほどの質問にも表れているという風に勝手に解釈しております。

（「歴代尾張徳川家当主」というタイトルのスライドを示しながら、）名古屋を拠点とする尾張徳川家ですが、初代は家康の第 9 男の義直でございます。2 代が光友で、途中の代は私ちょっと歴史が嫌いでご先祖さんの順番を言えませんので省略いたします。幕末になりますと、幕末の 17 代当主が慶勝、その後明治に入って 18 代義礼、そして 19 代当主の義親が徳川美術館の創設者であり、私のひいお爺さんにあたります。お爺さんの 20 代義知、父の 21 代義宣と来まして、現在私が 22 代目ということになります。

（徳川義親の写真の載ったスライドを示しながら、）これが義親の写真ですけども、この義親が右翼なんだか左翼なんだか良い人なんだか悪い人なんだかわからないようなことを色々やっております。そのようなことをお話ししながら、文化とはどのようなものかといったところを感じていただければと思います。

（写真の載ったスライドを示しながら、）これは最近では珍しい親子 4 代揃っての写真ですが、前列中央で座っているのがひいお爺さん義親とひいお婆さん米子、後列左側に立っているのが私のお爺さん義知とお婆さん正子、後列右側に立っているのが私の父親義宣と母親三千子です。前列右端にいるのが私の姉で、左端にいるのが若かりし頃の毛がふさふさだった頃の私になります。

（「尾張徳川に遺されたもの」というタイトルのスライドを示しながら、）尾張徳川家に遺されたものが、今日徳川美術館に遺されたものという風に言えます。どういったものがあるかと言いますと、家康が 1616 年に駿

府城で亡くなった後、家康の遺品を御三家で分けるのですが、その際家康の遺品目録を示したものを駿府御分物御道具帳と言ひ、この御道具帳で11冊分に相当する家康の遺品が尾張徳川家に相続されました。その後それらは尾張徳川家が代々受け継いでいき、今日では徳川美術館に収蔵されているということです。また家康は死後「東照大権現」となり神格化されました。こうなると単なるご先祖さんというレベルではなく、家康が持っていた物や使っていた物が何でもかんでも有り難い物になってしまいます。なので、美術工芸品だけでなく、家康が身に付けていた物、例えば徳川美術館には家康が身に付けていたふんどしや足袋が遺っています。有り難い物なんですよ、ただ美術館に来て展示ケースの中に黄ばんだふんどしが飾ってあったら、なんか美術館に来た気がしないですよ。しかしながら、家康の遺品であれば、普段お目にかかることのないような下着類まで遺してあります。そして徳川美術館の大きな特徴は、由緒伝来がわかる記録史料が多いということです。これは大名家ならではとも言えると思います。今日日本の美術館で、例えば東京の方ですと、五島美術館とか根津美術館とか私立の美術館がいっぱいあります。そういった美術館は主に明治以降に実業家の方が財をなして、そのお金であちこちから美術品を買ってきて、それを元に美術館を作ったといったものが多いんです。徳川美術館の場合は、明治大正昭和時代にあちこちから買い集めてきた物ではなくて、江戸時代からもともと徳川家にあった物がそのまま遺っています。江戸時代にこれはいつ誰々からもらったとか、逆にいつ誰々にあげたとかいった記録がすべて遺っているので、作品単独の価値に加えて、由緒伝来がわかるという意味でこれが作品に付加価値を与えていると言えます。

（「純金台子皆具」の写真の載ったスライドを示しながら、）例えば、これは3代将軍家光の長女千代姫がお嫁入りした時に嫁入り道具として持ってきた純金の台子皆具です。金でできているお茶道具です。由緒伝来がわかっているのも、もちろんそれなりにお値段はするわけですが、もしこれを原材料だけで考えても金でできているので、グラム当たりいくらというような計算をすれば、これを全部溶かして金の塊にしたって何千とか何億とかになるんですよ。それに加えて、工芸品としての価値、そして由緒伝来としての価値が上乘せされるわけです。

（「涙の茶杓」の写真の載ったスライドを示しながら、）これが同じく徳川美術館に収蔵されております茶杓です。原材料は竹です。先ほどの金と違って竹ですから、もしこれがボンと人の家にでも置いてあったら、竹をひん曲げて作ったような耳掻きが少し大きくなったよ

うな単なる茶杓に過ぎず、原材料で考えたらこの茶杓は100円もしないでしょう。ところがこれは「涙の茶杓」といって、千利休が最後豊富秀吉に切腹を命ぜられて腹を切るわけですが、その切腹の前に自らが催した最後の茶会、そのために千利休自らが竹を削り作ったと言われている茶杓なんです。この茶杓は千利休の死後、弟子の古田織部に託され、古田織部がこの竹筒のケースを作りました。この竹筒のケース、よく見るとここに穴が開いています。これは、この茶杓をケースの中に入れても、この穴から中を覗けるようになっています。古田織部はこの茶杓を千利休の位牌代わりに拝んだという言い伝えが遺っております。こういった由緒伝来がわかるからこそ、原材料費が100円するかどうかというような物でも、先ほど見せた純金の台子皆具と肩を並べる美術工芸品として、美術館で展示する意味が出てくるわけです。由緒伝来がわからず、どこかの農家の物置から出てきたら、ただの茶杓になっちゃうわけです。この由緒伝来がわかるというのが徳川美術館の大きな強みとも言えると思います。

（「お雛壇飾り」の写真の載ったスライドを示しながら、）余談ですが、これも由緒伝来の一つです。徳川美術館では、毎年2月から3月にお雛様の展示をしているんですが、その目玉の一つのお雛壇飾りという物です。この雛壇の手前の部分に、毛氈が敷いてあるんですが、雛壇中段には右側から母、お婆ちゃん、ひいお婆ちゃんのお雛様がありまして、順に昭和、大正、明治のお雛様なんです。そこまで古い物じゃないんです。ところが、この雛壇の前に敷いてある毛氈は、端っこにこのような書付があります。（「毛氈の端に付いている書付」の写真の載ったスライドを示しながら、）私には読めませんが、私の学芸委員に読んでもらったところ、前半部分には毛氈の寸法が書いてあり、後半部分には「江戸時代に大奥でお雛様を飾るとき、その雛壇の前に敷いた毛氈である」といったことがここに書いてあります。こういったことが書いてあるからこそ、この毛氈もお雛様と一緒に飾る価値が出てくるというわけです。これも由緒伝来がわかる一つの例かと思えます。

（「維新後の尾張徳川家」というタイトルのスライドを示しながら、）さて、話を江戸時代の話から明治時代の話に移します。明治維新で大政奉還が行われ、尾張徳川家に限らず、全国の大名が明治政府に領地を召し上げられ領地を失いました。その代わりに、旧大名は華族という特権階級になりました。明治4年には廃藩置県があり、尾張などの藩がなくなり愛知などの県に置き換わりました。今でも各都道府県に県知事さんがいますが、明治政府は県知事を任命するときに、もとの領地のお殿様を県知事に任命する例があったそうです。知事っ

ていうちゃんとした役には、明治政府から給料を払わないといけないんですが、この給料の決め方が明治政府は非常にいい加減だったんです。本来なら政府なので、例えばこの県はどのくらいの税収入や支出があるのかといったことを考えて給料を決めなければならないんですけど、なんともとの領地、尾張の場合は6万9500石ありましたが、もとの領地の石高の1/10ぐらいいを年俸として払えばいいだろう、どれくらい収入があるかといった計算をせずに、支出の方を決めるといった無茶なことをしました。例えば、スライドにあるように7万石だとしたら、現代の貨幣価値にしていくらくらいになるのだろうかということ、1石というのは10斗、お酒で言うと1升瓶が10本入る樽がありますよね、あれが10個、つまり1斗樽10個分が1石です。ということは、1升瓶が100本、1升瓶は1.8リットルなので180リットルということになりますけど、お米にするとちょっと隙間ができますので、1石でお米175kgぐらいという計算になります。すると、ブランドではない普通のお米であれば、1kgあたり300円から400円で買えるのですけど、そこから計算すると1石というのは大体5万円くらいになります。1石5万円でそれが7万倍ですから、35億円ですね。県知事の年俸が35億円という計算になっちゃうんです。本当にこんなに高かったかどうかはわかりませんが、仮にもし貨幣価値が10分の1になったとしても、年俸3億5000万円です。年俸3億5000万円ももらえるんだとしたら、私でも愛知県知事やりたいんですけども。とにかく、こういった法外な給料を払ったがために、明治政府はすぐに潰れそうになるんです。明治9年には俸給を数年分公債で前払いして、知事の給料を打ち切るといってとんでもないことをするわけです。そのとき、知事をやった大名家族にまとまったお金が入ったので、その人達がお金を持ち寄って、第十五銀行通称華族銀行と呼ばれる銀行を設立するわけです。そして、その銀行の運用益の利子配当で生活をするといった形に明治半ばから変わっていきました。そうすると、働かなくても生活ができてしまう状態になりますので、本来であれば大名は武家社会の最上位に位置するはずなんですけれども、武士といえばやはり質素儉約とか質実剛健という気風を尊ぶべしというのが江戸時代の武士だったわけなんですけれども、そういった気風を段々忘れていってしまったわけです。また、運よくだか運悪くだか知事に任命されず、自分で働き口を見つけて働く大名もいたわけです。彼らの中には、「殿様商売」という言葉にも表れているように、お金は持っているけど頭はそれほど良くない世間知らずの人どころに、うまい話を持ちかけて身ぐるみ剥いで逃げる、みたいな人が何時の世にもいるわけです。そういうわ

けで、大名の中には気づいたら無一文になってしまった人もいます。また、華族には世襲財産法という特権があり、今でも代替わりの時に相続があり相続税を払わないといけないんですが、明治時代でもちゃんと相続税は払わないといけなかったわけです。華族が持っている財産の内、世襲財産だと指定されている物については相続税の対象から外してもらえたんです。ですから、江戸時代から代々引き継いできた鎧兜や刀や茶碗などは世襲財産と認められるんですけど、明治時代になってから新しく建てた家などは先祖代々受け継いできた物ではないので、そういった物は相続税の対象になるということです。お金はないが相続税は払わなければならない、といった事態になると、世襲財産になっている物、例えば茶碗なんかを一つ売れば、それで十分相続税を払えちゃうんですが、茶碗は世襲財産だから売っちゃ駄目、家は世襲財産じゃないから売ってもいいとなると、世襲財産法という法のしがらみ故に、財産を手放せなくなってしまうのです。これはメリットである反面、デメリットでもあるのです。大正時代には、第一次世界大戦や関東大震災といった人災や天災がありました。更に、昭和の頭になりますと、金融恐慌もあり、日本全体が混乱の時期になるわけです。その中でも大名家の末裔の人達というのはかなり混乱した時代の中を生き、生活に困るような人達がでてくる時代でした。

(「曾祖父徳川義親」というタイトルのスライドを示しながら、)このような時代背景の中で私のひいお爺さんの義親は、明治19年に越前藩の松平の家に生まれております。尾張徳川家の生まれではありません。この松平春嶽というのが幕末の殿様ですけども、お殿様の子供としてもっとも近年まで生きたのがこの義親なんです。昭和51年の9月、私が中学3年生のときまで生きておりました。そのため、本人は「最後のお殿様」と言われておまして、実際に「最後の殿様」というタイトルの本も出してあります。義親は明治41年に尾張徳川家の18代義礼と養子縁組をしまして、義礼の長女の米子と結婚して尾張徳川家の後を継いでいます。

(「義親のしたこと」というタイトルのスライドを示しながら、)この義親が明治41年から51年まで尾張徳川家の当主を務めるわけですが、色々なことをやっております。旧尾張藩士開墾の地、北海道八雲町の開拓に尽力とありますが、(「北海道」の地図の載ったスライドを示しながら、)ここに八雲町があります。ここに明治11年から旧尾張藩の人達が移住して、開墾し自分たちの新天地理想郷をここに作ろうと計画しました。これは尾張藩に限らず、明治維新以降あちこちの大名が、それまで株式会社尾張徳川家という会社があって、職員と

してお侍さんを抱えていた、ところが尾張徳川家という会社は明治政府に潰されてしまうわけですから、尾張徳川家のもとで働いていた武士の人達ってというのは失業するわけです。失業した人達が町をうろろろしていると、治安は悪くなるので、失業者対策として再雇用のための職業訓練とか各地の大名は一生懸命やるんですが、その失業対策の一つの手として、江戸時代までは北海道の松前藩から上の部分は未開の土地「蝦夷地」だったわけです。その「蝦夷地」に新天地を求めて移住しようっていう計画が各地の大名の間で起こったわけです。その中で、尾張藩が選んだのが八雲町だったのです。入植にあたって、今までは腰に刀をぶら下げていたお侍さんが、北海道に行って、今度は鋤や鍬でもって畑を耕そうかってそんなこといきなりできるわけないんです。もともと畑であった場所ならまだしも、未開の地ですから、畑として使えるようにするために土壌改良なども行わなければならなかったのです。そういった技術や知識、経験を持たないまま北海道へ移住してきますので、尾張徳川家の旧藩士の人達の生活をサポートするために、北海道に徳川農場というのを作りました。その徳川農場のもとで旧藩士の人達は、職員として雇われ、畑の耕し方や牛の乳の搾り方などの酪農や農業の知識を身に付け、独り立ちできるようになった人から独立させるといった支援を明治から大正にかけてやっておりました。義親は明治41年以降、主に大正になってから、この八雲町に頻りに脚を運んでおります。北海道はツキノワグマよりも大きいヒグマがたくさん出るところです。熊というのは人間の生命を脅かす生き物ですが、北海道の原住民であるアイヌの人達にとっては、熊は神様の化身なんです。神様の化身だから殺しちゃいけないかという、そんなことはなくて、アイヌの人達でも生活を脅かされたら熊を殺すんです。けれども、アイヌの人達は熊の命を奪った時には、「熊祭り」という熊の魂を天界に帰してあげるといふ祭りを必ずするんです。義親はアイヌの人じゃなかったんですが、自分たちが後からアイヌの人達のところに移り住んできたわけですから、先住民族の文化や風習は尊重しなくちゃいけないと思っていました。（義親が熊狩りをした時の写真が2枚載ったスライドを示しながら、）右側の写真は義親が熊狩りをして熊を仕留めたときの写真です。左側の写真は、真ん中に座っているのが義親です。アイヌの人達と一緒にアイヌの衣装を着て、ちゃんと「熊祭り」をして、アイヌの人達との信頼関係を保っていたのです。大正の半ばになると、義親が皮膚病を患い、お医者さんに転地療養を勧められます。転地療養先として勧められたのがハワイなんですけれども、義親はなぜかハワイは嫌だといって、マレー半島へ行くことにしたんです。しかし今と違って、飛行機で

ピョット行って帰ってくるということが出来る時代ではないので、海外へ旅行するとなると、命がけとまではいかないですが、往復に何ヶ月もかかりますし、海外に行くというだけで新聞記者が取材にやってくるという時代だったそうです。なので、義親がマレー半島に行くとなったときは、新聞記者が取材に来たわけですけど、北海道で熊を仕留めて熊狩りをしていた殿様だから、今度はマレー半島で虎狩りをしてくるんじゃないか、と新聞記者から質問されまして、義親は自分は虎狩りに行くわけじゃなく病気を治しに行くんだと記者に答えるんですけども、その新聞記者が「熊狩りの殿様、マレーに虎狩りに行く」って言う記事を書いちゃうんですね。で、その記事が、義親が神戸を出て、香港経由でマレーシアに行ってる最中に、新聞記事のほうに先に香港で英字新聞に載って、それがマレーの方でも本人より先に伝わりまして、義親がマレーに着いた時には、現地の王様であるサルタン自らが虎狩りの用意をして待っててくれたということになっちゃいまして、結局病気の治療もしたんでしょけれど、虎狩りもして帰ってくると、（義親が虎狩りをした時の写真2枚が載ったスライドを示しながら、）義親と虎ですね。虎だけではなくて像とかワニとか色々な物を狩って帰ってきたようです。こういったこともあって、これ以降義親は「虎狩りの殿様」という異名を持つことになります。この旅行から帰ってきてすぐに、大正10年の終わりには妻の米子やお供を従えて、約1年かけてヨーロッパの方へ周遊旅行へ出かけます。イギリス、スペイン、スイス、フランス、オランダあちこち回んですけど、寄った先にスイスのベルンという町がありまして、スイスのベルンでは今でも町のシンボルが熊なんです。熊をモチーフにした木彫の民芸品が非常に盛んなところなんです。（2体の木彫の熊の写真の載ったスライドを示しながら、）左側が義親が実際にスイスから持ち帰ってきた木彫の熊です。大正11年の暮れに帰ってくるんですが、翌大正12年になると、この木彫りの熊を持ってまた北海道の八雲町に行くんです。なぜかという、北海道は冬場は雪が降り、外で農作業ができないんです。なので、雪が降っている間は家の中で何かしら生計を立てることが出来るような仕事をしなきゃいけないんです。そこで、北海道と言ったら熊がいっぱいいるんだから、こういう木彫の熊を家の中で作ってみてはどうだと奨励しました。しかしいきなり作ってみてはどうだと殿様に言われても、いきなり作れるようにならないです。作る道具もなかったんで、最初は鑿の代わりに傘の骨を削って使ったなどの記録が遺ってます。「最初のうちは売り物になるようなものではないけれども、頑張って作ったものは全部自分が買いあげるからやってみろ」と、義親は奨励しまして、そ

れによってできた第一号の木彫の熊が右側になります。この2つの木彫の熊は今でも北海道の八雲町の郷土資料館に遺っております。そしてこれが、北海道のお土産として有名な木彫りの熊のルーツなんです。もともとは義親が大正 11 年にスイスから持ち帰ったこの一体の木彫りの熊、これから始まって最終的には北海道全土に渡る有名なお土産品にまでなったということです。文化的な面ですと、大正時代で既に国宝に指定されていた源氏物語絵巻などを、どのようにして後世に遺していくかといった試みを大正 15 年辺りから着手していたようです。源氏のことはこの後詳しくお話しします。また、昭和初期の金融恐慌などを経て、昭和 6 年に財団法人を設立して、それまでは個人で先祖代々受け継いできた美術工芸品を法人の管理に切り替えていったのです。昭和 17 年には、当時第二次世界大戦中でしたが、義親は自らマレーに行かせてくれと日本軍に志願するんです。なぜかという、先ほど大正 10 年にマレーに転地療養に行ったと言いましたが、そのマレーでお世話になった人達が日本軍の侵攻の過程で、傷めつけられたり命を奪われたりといったようなことがあったらいたたまれないという気持ちがあったからです。最終的にマレー半島の南端のシンガポールに 2 年ほど駐留するんですけれども、そこで今日でも遺っているラッフルズ・ミュージアムという博物館の館長に就任します。日本軍が侵攻する前、シンガポールはイギリスの植民地ですから、イギリス人がいっぱい居たわけですが、日本軍が攻めてくるぞとなると、みんな本国に帰っちゃうわけです。ところが、ラッフルズ・ミュージアムにいたコナーという学者さんは、逃げそびれたのか自らそこに残ったのかはわかりませんが、日本軍がシンガポールを侵略した後も、ラッフルズ・ミュージアムに残っていたんです。本来であれば、イギリス人なので捕虜になるんですけども、義親はそんなことでもタダ飯を食べる人間が増えるだけだと言って、学者なんだったら敵味方関係なくちゃんと研究を続けなさいと言って、戦時中も研究を続けさせたそうです。給料まで払ったという風に聞いております。義親がシンガポールでやったことの中で、世の中の戦争史上非常に珍しいことが一つ起こります。普通戦争で、侵略する側がどこかを攻め落とすということになれば、その土地の美術工芸品やなんかをすべて持って帰っちゃう、持って帰れないような建物などは壊して自分たちの文化を押し付けるということをするわけですが、イギリス人が逃げ帰ってもぬけの殻となった家から、貴重な書籍とか美術工芸品を全部回収して、ラッフルズ・ミュージアムの収蔵品に加えてしまったんです。ですので、日本軍が占拠しているにもかかわらず、博物館や美術館の収蔵品が減るところかむしろ増えて、

整理までして帰っていったというようなことが起こりました。これは世界の戦争史上でも唯一の例とされています。このように、義親は現地の人達の文化を絶対に破壊しちゃいけないと日本軍に徹底させていた、と戦後捕虜になっていたイギリス人学者のコナーさんも証言しております。コナーさんはその時の出来事を後に本にもしております。義親がやったことを話していると時間がどんどん過ぎてしまうので、端折りますけども、昭和 6 年にも 3 月事件という未遂のクーデターがありました。内容は私もしくは把握しておりませんが、このクーデターに当時 30 万円ほどを提供しましたが、結局クーデターが未遂に終わったので、その資金は日本社会党の創設の資金に回されました。当時の 30 万円っていうのは、今言う 30 億円くらいの金額になると思います。つまり、社会党創設には実は私のひいお爺さんが関わっていたということになります。また、生物学者としては生物学研究所で日本で初めてクロレラの培養をしていました。社会福祉関係ですと、聾啞連盟とか精神薄弱者育成会なんかの重責を担っていたようです。虎狩りと熊狩りの関係で猟友会の会長を、文化面では鈴木バイオリンの支援をしていたようです。晩年の本人が一番気に入っていた肩書は、理髪業組合の名誉会長でした。なぜこうなったかという、ヘアスタイルで虎狩り頭ってありますよね、この虎狩り頭と虎狩りをやる殿様をかけたということです。義親はこれを大いに喜び二つ返事で承諾したという風に聞いております。

(「こんな人とも交流がありました」というタイトルのスライドで写真を示しながら、) これは大正 11 年にヨーロッパ旅行から帰ってくる時の船の中で仲良くなった人です。若いころの写真なので、どなたかちょっとわかりにくいかもしれませんが、左が義親です。座っているのはアインシュタイン博士です。アインシュタイン博士が初来日される時の船と義親がヨーロッパから帰ってくる船が一緒でして、船の中で仲良くなって、実際に自宅に招いて晩餐会を開いております。(吉田親子の写真を 2 枚載せたスライドを示しながら、) これは昭和 10 年にある親子が、北海道八雲町の徳川農場を訪ねてくださった時のスナップです。右端が義親で、中央がお爺さんの義知ですが、この 2 人に挟まれている 2 人が親子で左側がお父さんで右側が娘です。これもちょっと若いころの写真なのでわかりにくいかもしれませんが、「バカやろう解散」で有名な吉田茂首相とそのお嬢さんの吉田和子さん、後の麻生和子さんです。麻生太郎元首相のお母さんです。一時は日本で最も政治に影響力のある女性と言われた方です。このように義親は吉田親子とも親交がありました。右側の写真の吉田和子さんの後ろに写っている

物が何だかわかりますか？檻の中に熊が写ってるんですよ。これは山で野生の熊をとっ捕まえてきて、生きてる熊を見ながら、毛並みや動きなどを研究して、木彫の熊を作っていたという記録が遺っていますが、それを忍ばせる写真だと言えます。（ヘレン・ケラーの写っている写真2枚の載ったスライドを示しながら、）先ほど福祉関係で、聾啞連盟の総裁をしていたとお話ししましたが、義親の右側にいる帽子を被っている女性がヘレン・ケラーさんです。ヘレン・ケラーさんが昭和12年ぐらいに日本に初来日された時に、昼に自宅に招いて撮影した写真です。右側は、自宅の庭の石灯籠をヘレン・ケラーさんが、当然目は見えませんので、手で灯籠の形を探ろうとしているのがわかるスナップです。この石灯籠は今でも私の家の隣の家の庭に遺っています。

（「国宝源氏物語絵巻」というタイトルのスライドを示しながら、）徳川美術館の一番の目玉収蔵品はと言いますと、やはり源氏物語絵巻が有名です。これは初代義直のときには尾張徳川家にあったということはわかっていますが、正確な伝来は残念ながらわかっておりません。しかし、江戸時代でも多くの人達を魅了したことには間違いありません。今日では源氏物語絵巻が描かれてから900年近く経っていますが、江戸初期の頃でも作られてから500年近く経っているわけです。死ぬまでに一回でいいから見てみたいと思っていた人達は多くいたでしょうが、実際拝めた人はごくごく一部の人達だけだったでしょう。当時は簡単に複製もできませんでした。今だったら、写真に撮ってプリンタで印刷してといった形で簡単に複製が作れるんですが、当時はそう簡単には複製は作れないので、本当に限られた人しか見ることができなかったということです。当時源氏物語絵巻を持っている人は模本を作り、その幾つかは徳川美術館に遺っております。

（「徳川義親の苦悩」というタイトルのスライドを示しながら、）義親はこういった貴重な文化財を受け継いでしまった以上は、それを後世に伝えていかなければいけないですし、多くの人に見てもらわなければならないと考えたわけです。しかし、とりわけ源氏物語絵巻などは見せれば傷むのです。源氏物語絵巻は茶碗などは違って、見せるためには巻物を開かなければならず、また見終わったら閉じなきゃならないんです。そうすると、非常に傷みやすい物ですので、見せたいけれども見せれば作品は傷み、その寿命をどんどん縮めてしまうという保存と展示という相反するジレンマがあるわけです。このジレンマを解決するために、義親は非常に精巧な肉筆模写、つまり手で書き写してもらったレプリカを作ろうという風に思い立つわけです。そこで依頼をした

のが田中親美さんという人です。（絵巻の載ったスライドを示しながら）実際どのぐらい傷んでいるのかをちょっと見ていただきたいと思います。これは関屋という徳川美術館にある絵巻の一場面ですけども、これを斜光撮影と言って横から光を当てて撮影すると、（巻物を斜光撮影した写真を示しながら、）このように皺が縦に何本も入っているのが見えるんですね。これは巻物を巻いてあった関係で、縦方向に皺が入ってるんです。中には影ができるくらいめくれ上がっているところもあるんです。真正面から見ると傷みは見えにくいですが、斜光撮影により見ると実はこんなに傷んでしまっているのがわかります。これをそのまま皆さんにお見せするために、巻いて開いて巻いて開いてを繰り返しているところになっちゃうということで、精巧な模本を作ろうと考えたわけです。

（「複製事業の歴史、肉筆模写」というタイトルのスライドを示しながら、）このような経緯で田中親美さんをお願いしまして、大正15年に製作を開始し、昭和10年に完成をしております。この作製過程で、義親は大英断をするんです。源氏物語絵巻は巻物だったんですが、トイレットペーパーみたいに1枚の紙じゃないんですよ。絵が描いてある部分と詞が描いてある部分で和紙はそれぞれ別々なんです。それを繋ぎ合わせて巻物にしてあるんですけども、その繋ぎ目から全部切り離して、場面ごとにすべて額面装に仕立て直そうと義親は考えたわけです。しかし周囲の大反対に合いまして、しまいには誰もやらないんだったら自分で切り離して額面装に言い出しまして、あんたみたいな素人に切り離されたらそれこそお宝がだめになっちゃう、ということでこの田中親美さんが切り離す作業もやってくれました。今日徳川美術館に収蔵されている源氏物語絵巻は額面装になっているんですけども、田中親美さんが描いてくれた源氏物語絵巻は巻物の状態で作ってくれてありますので、これは卷子装の姿を今日に伝える最もよく出来た模本と言えらると思います。（模本の写真の載ったスライドを示しながら、）これが実際に田中親美さんが描いてくれた模本の一場面です。

（「複製事業の歴史、木版印刷」というタイトルのスライドを示しながら、）これで原本から模本というレプリカを作ることが出来たわけですが、これではコピーが一つ出来ただけで、あちこちで色んな人に見てもらってわけにはいきません。やはり多くの人にご覧いただくためには、印刷技術を使うべきだということで、色々な印刷を試しております。最終的には木版源氏という印刷をするわけですけども、その前の過程では白黒印刷やカラー写真の印刷もやりました。ただ当時のカラー写真の印刷技術では、やはりどうしても原本と同じような色

合いは出せないということで、肉筆模写を手がけてくださった田中親美さんに相談したところ、木版だったら沢山の版木を用意して、それぞれの版木でこの部分はこの色というのを決め、何度も重ねて刷っていくのがいいだろうと言われました。この時使う絵の具は岩絵の具を使いますので、実際に筆で描く時と同じような絵の具が使われるということです。木版印刷だったら、岩絵の具の風合いが出せるだろうということで、当時の第一人者であった川面義雄さんに製作を依頼します。これが昭和17年、第二次世界大戦が始まってからお願いしたので、川面さんは戦時中作りかけの版木を担いで、空襲の中を逃げまわったという風に聞いております。また、源氏物語絵巻の中には僅かではありますが金色や銀色を使っている部分があるんです。川面さんが戦後になって作業を再開したとき、この金や銀といった色は戦後米軍の統制物資になってしまい、簡単には手に入らなくなってしまいました。そこで私のおじいさんの義知が米軍にかけあって、実際に木版源氏を作っている現場まで米軍を連れてきて、どういった文化事業なのかを説明して、認可を得まして木版源氏の製作を続けることができた聞いております。最終的に昭和24年に、徳川美術館には源氏物語絵巻が3巻残ってるんですけど、その内の1巻分が完成いたしました。ここに至り、徳川美術館は資金的に底を突き、もうこれ以上作業ができないと断念してたんですが、1巻だけで打ち切ってしまうのはもったいないということで、東京国立芸術大学が残る2巻の製作費用を自分たちが出しましょうと言ってくれまして、昭和34年に徳川美術館に今日ある3巻分の木版印刷が完成しております。更に今日、五島美術館にも残っております1巻の製作も終えまして、昭和38年に今日現存する源氏物語絵巻の全巻の木版印刷が完成しております。版木は印刷する度にすり減ってしまうので、何千何万部もは作れないんですけども、一応この数十数百の単位で源氏物語絵巻のコピーが作られるようになったということです。なので、今からほんの50年ちょっと前では源氏物語絵巻のコピーはできなかったんですね。

（「義親は何を遺そうとしたのか？」というタイトルのスライドを示しながら、）このような技術により、源氏物語絵巻に限らず、文化財を後世に伝え傷めないように保存しつつも展示しようとする、といったことを義親は手がけてきたわけです。このように義親が文化財の保存や美術館の創設に至った理由は、やはり一番大きいのは戦争でしょう。義親が生まれた明治19年から昭和20年の第二次世界大戦が終わるまで、9つの戦争がありました。義親はこの9つの戦争すべてに出兵したわけではないですが、このように戦争が多くあった時代ですから、世の中は混乱している時代だったと言っても間違い

ないと思います。こういう時代に生まれたからこそ、義親は文化という物を遺し守るということの大切さを、非常に強く身を持って理解していた人なんだという風に言えると思います。徳川美術館は大名文化を伝える美術館であるというふうに言われていますが、文化という言葉は色んなところに付きますよね。例えば、日本文化とか若者文化とかサラリーマン文化とか。辞書を紐解くと、「文化というのはある時代の中である地域やある年齢層など特定の括りができる人達の中の共通の認識である」と理解できます。徳川美術館に伝わっている大名文化は、大名が大名として嗜んでおこななければいけない、身に付けておこななければいけない礼儀作法だとか、人付き合いのための儀礼作法といったものが形として遺っているわけです。例えば、お客様をおもてなしするためのお茶の道具、また能の演じ方や教養の一端としての詩の詠い方や絵の描き方なども求められたわけです。例えば、サラリーマン文化を考えてみて下さい。サラリーマンだとお付き合いのためにやらなければならないことがありますよね。接待ゴルフとか接待麻雀、接待カラオケなど、サラリーマンの人達も人付き合いのために嗜んでおこななければならないことがあるわけです。同様に、大名の人達もお茶だったり能だったり詩だったりといったものを嗜んでおこななければならないのでした。大名に関して言えば武士なので、武術や剣術も出来なければならないということなんです。つまり、サラリーマンって言われたらこういうことが出来なきゃいけない人達だよ、大名って言われたらこういうことが出来なきゃいけない人達だよっていう認識を後世に伝えなければならないんです。彼らがいなくなったら、彼らが生前何をしていたのかということは後世の人達はわからないからです。なので、彼らがどんなことをやっていたのかを後世に遺すためには、彼らが生活していた家に遺されていた道具を全部遺していく必要があるだろうということで、義親は美術館という形を選んだわけです。その大きな理由は、大正から昭和にかけて、自分の周りであちこちの大名家が生活に困って大きな売立をしていく中で、自分の家は何とかそれを免れて後世まで先祖伝来のものを遺していきたいという思いもあったんでしょう。これは私の父親が実際に義親から聞いたそうなんですが、「先祖伝来のものは絶対に手放してはいけないよ、自分の子供くらいは躰けられるけど、孫やひ孫ともなるとどんな出来損ないがでてくるかわからないので信じられない。これらの美術工芸品を個人管理から法人の管理にしちゃった方がいいだろう、ということで財団を作り美術館を作った」と語っていたそうです。義親のひ孫は私なので、あの世に行ったら私は出来損ないだったでしょうか、というのはちょっと聞いてみたいところですね。

散逸しなければどこにあってもいいのかという問題に関しては、やはり尾張徳川家の物っていうのはその地にあるからこそ、大名文化を伝える要素がより一層強くなるだろうと思います。そして冒頭でも言いましたけども、由緒伝来がわかるような文献資料によって、当時の政治的な力関係や社会背景などがわかるわけです。

（「文化を守ることは平和を守ること、文化の保存を通じて平和の尊さを語る」というタイトルのスライドを示しながら、）義親は結局、文化とは平和な時じゃないと育めないですし、心や生活に余裕が有る時じゃないと過去の文化を守り遺す行為になかなか及ばない、と考えたわけです。しかし、自分たちがやらなければならないのは、文化を守り遺すことではなく、平和な社会をちゃんと作り守っていくんだという気持ちを持つことのほうが大事だと考えたわけです。江戸時代は戦争なく260年ぐらい続いた平和な時代ですが、そういう平和な時代だからこそ育まれたのが、大名独特の文化や町民の文化などでした。そうして育まれた文化遺産を今日に伝え、それを徳川美術館にて皆様にご覧いただくことによって、何を感じて欲しいかと言えば、「平和な社会を守ることが大事なんだ」ということです。これが義親が一番言いたかったことなんだろうと思います。

時間になってしまいましたが、この後が実はこの学会のために2ページくらい付け足した部分です。（「徳川美術館でのVR事例」というタイトルのスライドを示しながら、）残念ながら徳川美術館ではVRの技術は使っておりません。一番大きいのは、CGによる描かれた当時の色鮮やかだったであろう源氏物語絵巻の復元です。ただこれは平面の世界ですので、VRとは言えないかなと思います。徳川美術館で唯一VRといえるようなものは、イメージモールジャパンという凸版印刷会社と日立製作所が共同で作った会社がありまして、そのプロジェクトで徳川美術館に収蔵されている能面、（能面の三次元的な写真を示しながら、）能面というのは正面から見るとこういう状態ですね。ところが、光の当て方を変えると、色々と表情が変化するんですね。ですので、この能面を色んな角度から写真を撮って、座標を全部コンピュータ上で繋ぎあわせて、能面の3次元データを作りました。それに色んな角度から光を当てると、どういうふうに表情が変化するかというのをCGで再現することが出来ます。これが徳川美術館で唯一VRと言えるかなというようなものですが、今後チャンスがあればもっと他のことにもチャレンジしてみたいと思っています。

（「VRに期待するもの」というタイトルのスライドを示しながら、）そして今日の最後ですけども、私なりにVRに期待する部分として、美術館という立場では

VRによる作品鑑賞には興味があるんですが、ただ現実問題で考えると、データの作成や設備維持が大変なのかなと思ってしまいます。ですが、今後VRに是非とも期待したい部分というのがありまして、それは一言で言えば修復シミュレーションへの応用です。皆さん、CTスキャンってご存知ですよね、人間の体の断面を上から下までスキャンできる装置です。あのCTスキャンの美術品バージョンが、昨年までですと九州の国立博物館にしかなかったんです。ですが、今年になって東京の国立博物館と京都博物館の2箇所に、美術品用のCTスキャンが設置されました。今まだ調整中だと思いますが、来年ぐらいから本格的に稼働が始まる予定です。3Dスキャナだと外側の情報は撮れるんですが内側の情報は撮れないですよね、でもCTスキャナだと断面で全部撮れるので、作品の内側もわかるわけです。それによって何ができるかという、例えば中身が繰り抜いてあるような物であれば、厚みなどがわかるわけです。あと、漆が塗ってある器などは、表面塗装がしてあるため内部の構造がわからないんです。なので、木の板を縦に繋いで円形にしたのか、1枚の板をぐるっと巻いて円形にしたのか見当がつかないんです。また、金具が釘みたいに留めてあって、それを引っ張れば抜けるのか、裏側で留め金があって無理に引っ張ったら壊れちゃうのか、といったこともCTスキャンを先にかけておけばわかるということです。そして、その結果とVR技術を組み合わせると、分解シミュレーション、つまりどこにどれくらいの力をかけたら壊れるのかといったことができるのではないかなと思っています。

大変取り留めのないお話を延々と1時間以上いたしました。私の話はこのぐらいにさせていただきます。是非今後このVR技術が私共の美術関係においても大いに恩恵のある技術として羽ばたいていくことを期待いたしまして、私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【略歴】

徳川義崇 (Tokugawa Yoshitaka)

徳川美術館館長

1961年8月生れ、東京都出身、学習院大学経済学部経済学科卒業。尾張徳川家22代当主、(公財)徳川黎明会会長、徳川美術館館長、名古屋市博物館協議会委員、全国美術館会議副会長、(公財)日本博物館協会理事、名古屋大学参与。IT分野にも興味を持っている。